〔研究会報告〕

西田天香 Workshop
――生誕 150 年を機に天香を考える

末村正代

SUEMURA Masayo

はじめに

2022 年 10 月 15 日、大正期に修養共同体・一燈園を創始した思想家であり宗教家、西田天香（1872–1968）の未発表史料・新史料に関するワークショップが、南山宗教文化研究所と複数の科研費研究の共催で開催された[1]。

今回のワークショップは、一燈園資料館「香倉院」に所蔵されている未発表史料および近年次々に発見されている新史料を取り扱う「西田天香史料プロジェクト」の延長線上にある。2021 年のプロジェクト開始以降、メンバーは香倉院で月一回の打ち合わせをおこないながら、一部史料の整理・翻刻を進め、次第に史料の全貌も明らかになりはじめた。そこで、史料価値の高い一次史料を紹介し、隣接する分野との交流の基盤を築くことを目的に、天香生誕 150 年ワークショップが企画された。当日は、一燈園および西田天香研究の実績をもつコメンテーター（岩田文昭）を迎え[2]、プロジェクト・メンバーが趣旨説明（大橋良介）、発表（宮田昌明・水野友晴・野田龍三）、司会（末村正代）を担当した。以下、はじめにプログラムを示し、次いで各登壇者による発表の要略を記す。

2022 年 10 月 15 日（土）14 時～ 17 時

1. 基盤研究（C）19K00080「物語としての浄土教―実証的宗教哲学からの探求」（研究代表者：岩田文昭）、基盤研究（B）20H01192「禅から Zen へ―世界宗教会議を通じた禅のグローバル化の宗教史・文化史的研究」（研究代表者：守屋友江）、若手研究 21K12852「近代における禅越境の動態―釈宗演の門人・千崎如幻を中心として」（研究代表者：末村正代）。
2. 岩田文昭「浄土教における回心とその物語――近角常観・綱島梁川・西田天香」『大阪教育大学紀要』67、2019 年、57–72 頁。

趣旨説明：大橋良介
（公益財団法人日独文化研究所所長／京都工芸繊維大学名誉教授）
西田天香新史料プロジェクトについて――『天華香洞録』との関係において
発表①：宮田昌明
（帝塚山大学ほか非常勤講師／一燈園資料館「香倉院」研究員）
一燈園資料館「香倉院」所蔵書簡史料について
発表②：水野友晴（関西大学教授）
「母性的宗教」という観点から見た西田天香と一燈園
発表③：野田龍三（一般財団法人懺悔奉仕光泉林（一燈園）理事／一燈園史家）
野田蒐集史料について
コメント：岩田文昭（大阪教育大学教授）
司会：末村正代（南山宗教文化研究所）

趣旨説明：大橋良介氏

はじめに、プロジェクト・リーダーである大橋良介氏が、本プロジェクトの意義と今後の見通しについて趣旨説明をおこなった。

大橋氏は、「西田天香とは誰であったか」という問いを掲げたうえで、問う人の関心・立場・境遇――一燈園生活に飛び込んだ第一世代、第二世代以降、天香と交流をもった外部の人々、共鳴する人々や対立する人々など――によって、多様な天香像が想定され得るとの見通しを述べ、本プロジェクトを、いわゆる「宗教家」の枠組みに収まらない天香像を〈史料そのものに語らせる〉という仕方で照明していくもの、と位置づけた。さらに、「西田天香とは誰であったのか」は、「一燈園とは何であったのか／あるのか」という問いへとつながるとし、一燈園独自の構造――天華香洞というイデア、宗教生活（一燈園）と世俗生活（宣光社）の両輪という仕組み――は、宗教史一般における宗教と世俗の関係のなかでも、珍しいモデルケースになり得るとの見解が示された。

発表①：宮田昌明氏

一人目の発表は、宮田昌明氏による「一燈園資料館「香倉院」所蔵書簡史料について」であった。

宮田氏の発表では、西谷啓治の提言によって作られた一燈園の資料館、「香倉院」に所蔵されている史料が紹介された。はじめに、草稿等の天香記録、一燈園同人資料、所縁の人々の美術作品、各約１万通の手紙および葉書、一燈園機関誌『光』等から成る史料の概要が示され、次いで、一燈園現理事長・西田多戈止氏宅から新たに発見された、

天香の妻・奥田勝に宛てた約 200 通の天香書簡が、画像付きで紹介された。最後に、本プロジェクトで中心的に取り扱う書簡史料、とくに著名人とのやり取り、作家・倉田百三、俳人・尾崎放哉、陶芸家・河井寛次郎、日本画家・村上華岳、洋画家・柳敬助、日本ライトハウス設立者・岩橋武夫、画家・大石順教、長島愛生園初代園長・光田健輔、小鹿島更生園医師・周防正季、金光教学院長・高橋正雄、近江兄弟社創立者・吉田悦蔵、運動家・阿波根昌鴻、上海の書店経営者・内山完造、桜美林学園創立者・清水安三、神戸学院創立者・森わさ、丸紅創立者・伊藤忠兵衛ほか多数の実業家とのやり取りに関して、それぞれの概略が報告された。

発表②：水野友晴氏

二人目の発表は、水野友晴氏による「「母性的宗教」という観点から見た西田天香と一燈園」であった。

水野氏の発表では、専門とする鈴木大拙思想における「母性」を手引きとして、西田天香および一燈園における「母性性」を考察するという研究構想が紹介された。大拙の世界観が、西洋「対」東洋という対立的・独立的二者ではなく、西洋「プラス」東洋という相互関係的一体であると述べたうえで、大拙がこの東洋の多面性を「大地」を結びつけ、さらには「大地」を「母」と結びつけて語ることが取り上げられた。そして、大拙に代表されるその東洋観、河合隼雄においては「母性的原理」、松本滋においては「母性的宗教」という観点が、天香思想においても色濃く見られることが指摘された。史料に関しては、新たに発見された天香と妻・奥田勝との書簡を手がかりとすることで、天香の宗教思想における「母性性」、「女性性」の役割を解明し得るのではないかという見通しが述べられた。大局的には、こうした天香思想研究は、近代日本の宗教思想における「女性性」の役割に関する一事例として、新たな知見を提供することが期待されるという見解が示された。

発表③：野田龍三氏

最終発表は、野田龍三氏による「野田蒐集史料について」であった。

野田氏の発表では、天香史料に接したきっかけや経緯とともに、『感謝と報恩』出版に至る天香調査の途上でさまざまな史料――他の思想家の著作への寄稿や、全国各地での講演などの未発表史料――の存在が確認されていることが報告された。次いで、とくに初期天香思想における大きな契機であると同時に、アポリアとして立ちはだかる三点、(1) 北海道開拓事業の経緯、(2) トルストイ『我が宗教』に関する記述、(3) 長浜愛染堂での嬰児の泣き声を聞いた大悟体験に言及し、現在でも多くの疑問点が残されている

(1) について検討が加えられた。北海道に徴兵制が敷かれた時期と、天香の北海道開拓事業や徴兵検査などの事実との整合性が取れず、天香が北海道に入植した理由にはいまだ不明点が残さていることが指摘された。最後に、成果が見込まれる新しい調査地として、数多くの講演をおこなって熱烈に歓迎された長野、天香書簡の所蔵が予想される倉田百三記念館のある広島、江渡狄嶺の「狄嶺文庫」がある東京、綱島梁川関係資料が寄託された美術館のある岡山が紹介された。

コメント：岩田文昭氏

三者の発表終了後、岩田文昭氏が各発表者にコメントを述べた。はじめに、岩田氏が専門とする近角常観と天香との関わりを介して、近角と綱島梁川の関係を発見するに至ったという経緯が紹介され、あわせて、天香と近角の回心談が共通点を有することが指摘された。発表に対しては、はじめに野田氏が取り上げた天香の大悟体験に関して、その語りが、多くの歴史的宗教にも見出されるモデル――歴史的事実と乖離すると思われる出来事が、自己理解と他者への語りを通して精神的世界の表現、「物語としての宗教」となるというモデル――であり、天香の大悟もそのように理解し得るという認識が示された。次いで、水野氏に対しては、水野氏が提示した西洋「プラス」東洋という観点に対して、「西洋のなかの東洋」、「東洋のなかの西洋」という相補的な観点を導入すること、宗教の「女性性」についても、父性原理と母性原理との相補性に着目することが提案された。また、宗教・精神運動における女性の役割を考察することの必要性と広がりについても触れられた。宮田氏に対しては、「物語としての宗教」の考察と歴史的事実の調査のあいだに矛盾がないことを示し、徹底した調査と公開の必要があると指摘した。岩田氏の科研費研究で制作された「近角常観研究資料サイト」を示しながら、一燈園の機関誌『光』のデジタル化と公開、またプライバシーの問題を抱える書簡の場合は目録の公開という成果公開の具体案が提示された。コメント後、各発表者からひと言ずつ応答があった。

岩田氏のコメントをうけて、大橋氏より総括があった。天香の大悟体験の語りに代表されるような「物語として宗教」、「物語としての一燈園」のなかにも、単なる創作にとどまらない真実があり、また、「男性性」と「女性性」のなかにも、「慈父」的天香像や峻厳な天香像が存するように、西田天香および一燈園のもつ多様性がそれぞれの語りや天香像につながっているとの認識が示された。

フロアとの質疑応答

一人目の質問は、松本直樹氏であった。岩田氏と水野氏に対して、一燈園が共同体を形成するという「女性性」に重きを置く集まりであるならば、共同体を捨てる・去ることを意味する総路頭のような行事は、どのような意味をもち得るのかという質問がなされた。水野氏からは、「女性性」が一燈園のすべてを映すわけではないことを前提に、これまでにない観点の導入によって、総路頭にも新しい知見が得られる可能性があるとの応答がなされ、岩田氏からは、現代において男性原理と女性原理の二項対立でよいのかという点も含めて、「女性性」という言葉の使用に対して慎重さが必要であるという応答がなされた。二人目の質問は、小田淑子氏であった。小田氏は、水野氏の発表に対して、「父性／母性」と「男性／女性」とは完全に重なり合うものではないため、言い換えた際にズレが生じているという点、また「物語としての宗教」という観点に対しては、物語るだけでは経典にならず、「共同体による承認」が必須であるという点が指摘された。天香が共同体を作った意味は、「女性性」という説明では語り尽くせるものではなく、考察の範囲をより広げ得るのではないかという提言もなされた。さらに、小田氏の専門とするイスラームの宗教／世俗の関係が紹介され、商人からはじまる点で、一燈園とイスラームが共通するという見解が示された。大橋氏からは、天香の個人的思想から共同体がはじまるとき、その構造と力学がいかなる問題を生むのかという点に着目しているとの応答がなされ、水野氏からは、母性と女性という観点は、あくまで史料にもとづいて判断し、その使い分けによって天香思想の分析を試みるという見通しが示された。

おわりに

以上、2022 年 10 月 15 日に開催された「西田天香 Workshop――生誕 150 年を機に天香を考える」の報告であった。予想を超える 42 名の申し込みがあり、また、当日も終了時間を超えてフロアとの質疑応答がつづき、活発な議論がおこなわれた。西田天香の創始した一燈園という試みに対する学的関心の高さが窺えるワークショップとなった。さらに、たびたび話題に上ったように、当時の一燈園には、思想家や文学者、芸術家、実業家など多方面で活躍する著名人も数多く出入りしていた。西田天香史料プロジェクトが取り扱う史料には彼らとの交流の記録も含まれており、他の研究対象・研究領域に対しても、潜在的な波及効果を有していると考えられる。

なお、本プロジェクトは、2023 年度から基盤研究（C）（研究課題名「宗教教団形成における女性の意味と役割：一燈園西田天香新資料をベースにして」）に採択された。研究代表者は、本ワークショップで研究発表をおこなった水野友晴氏で、研究期間は 3

年間である。プロジェクト・メンバーも、それぞれ研究分担者や研究協力者を務める。今後、さらなる研究の進展が見込まれる。

すえむら・まさよ
（南山宗教文化研究所）